

第 41 回土木計画学研究発表会（春大会）：2010.6.5～6（名古屋工業大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：モビリティ・マネジメント研究の新展開	
日付： 6月 5日（土）曜日，セッション時間： 8:45～10:45	
オーガナイザー・司会者名（所属）：藤井 聡（京都大学）、谷口綾子（筑波大学）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：</p> <p>これまでの、IM 法やTB法などのいわゆる“TFP”を基軸とした伝統的MM技術のみでなく、様々なMMの可能性を示唆する様々な研究発表がなされ、文字通り、MM研究の新展開が改めて示されるものとなった。</p>
	<p>池田市におけるモビリティ・マネジメントのパッケージ実施と環境・まちづくり施策と連携した展開の取り組み 神田佑亮（(株)オリエンタルコンサルタンツ）</p> <p>→ 「地域通貨」的なシステムを導入する事例であるが、そのシステムをどのようにフレームするか、すなわち、“説明するか”によって、そのシステムの価値が大きく異なるのではないかと、言う議論がなされた。</p>
	<p>交通に関するイベント実施の態度行動変容効果に関する研究 大井元揮（DEC）</p> <p>→ 「イベント」は、自動車会社や煙草会社などが様々な実施している。彼らが繰り返しそれを実施しているということは、プロモーションという点で、費用対効果が十二分にあるということの証左である。その点を踏まえるなら、MMの展開のなかでも、こういうイベントを活用していくことは極めて重要であろう、という指摘が為された。</p>
	<p>マスメディアを活用したモビリティ・マネジメントの手法及び効果に関する研究 酒井弘（まち創成研究所）</p> <p>→ 長期効果はどうか、と言う質問がなされた。この点について、この発表で報告された諸事例については、プロジェクト期間の問題もあって、数ヶ月の評価に留まっているが、それ以上の効果を探した研究において、効果がなかった、消え失せた、というような報告は、今のところ筆者らの知る限り存在していない、という返答がなされた。</p>
	<p>観光モビリティ・マネジメントについての技術開発：京都・奈良での取り組み事例 宮川愛由（システム科学研究所）</p> <p>→ B/Cの評価がなされているが、様々な項目をバランス良く評価することが必要なのではないかと。また、今回のMMによって、観光客が減ったという可能性も踏まえることが必要なのではないかと、その点を考えるなら、より慎重を期した方がいいのではないかと、という指摘がなされた。</p>
<p>協働型交通施策のための計画分析ツールに関する一考察 川口康弘（三菱重工業）</p> <p>→ MMの展開に於いて、公共交通のフィージビリティをきちんと考えていくことは重要である、こうした研究知見の活用をMMの展開において検討していくことは重要である、という指摘が為された。</p>	

	<p>かしこいクルマ利用を促す異なった冊子の配布と最寄り駅からの距離が行動意図へおよぼす影響 山口幸生（福岡大学）</p> <p>→ 「動機付け」に様々な工夫が必要であることが改めて指摘され、その実験手続きについての確認の質疑が行われた。</p>
	<p>MMによる交通手段転換が「主観的幸福感」に与える影響分析 鈴木春菜（山口大学）</p> <p>→ 自動車からの他の手段への交通行動転換によって、人々の主観的幸福感が低下するというこ とはない、むしろ、向上するという傾向が見られた、という点が報告された。</p>
	<p>自転車に対する愛着意識と放置駐輪行為に関する実証的検討 羽鳥剛史（東京工業大学）</p> <p>→ 自転車の過去を想起させる intervention を行うことで、愛着が深まり、それを通じて放り駐 輪行為が減少する可能性が示唆された。ただし、想起された過去が苦い思い出で有る場合、愛着が 低下することもあり得るのではないかという指摘もなされたが、ニーチェのいう「運命愛」のコン セプトを踏まえるなら、愛憎半ばするような思いが、愛着とも言えるかもしれない、という議論も なされた。</p>

※発表件数に応じて適宜追加してください。